

番外編その2 Jへの夢を追いかけた二人に惹かれた『大きな人間たちの詩』

ひげぐまこと、私の熱き思い

これは、アビスパ福岡のサポーター3名の依頼を受け、2010年3月7日福岡市内で、約2時間半講演させて頂いた原稿を加筆・修正したものです。

もう22年(2010年当時)にもなります。ただただサッカー好きのこの私は、長男を当時発足したばかりの、今はなきブルックスサッカースクールの前身・ランカーフットボールクラブに入校させて頂きましたことをきっかけに、中央防犯SC、藤枝ブルックス、福岡ブルックス、そして、アビスパ福岡とチームが変遷する中、本当に長い間様々な形でチームの皆様とお付き合いさせて頂いてきました。

一昨年(2008年)の暮れの西日本新聞の連載「どうする!アビスパ」に端を発した、この度のアビスパ福岡の経営陣の刷新。これを機に、「市民球団アビスパ福岡」の再生に、サポーターの皆さんが何をすべきか、それを考えるために、この度このような私を福岡にお招き頂き、それを考える原点、即ち、人の子であれ、Jリーグチームであれ、その育ての苦しみは、その産みの苦しみを経験した者こそが、その苦しみが深い愛情となって克服できるものです。然るに、その産みの苦しみを皆様に伝えて頂きたいとの、平田さん、勝河さん、後藤さん、お三方からのお話を頂きましたので、話下手な私ですが、宜しくお付き合い下さいませ。

まずは、これまで永きに渡り、中央防犯SC、藤枝ブルックスとチームを支え、プロ化、本拠地移転という苦渋の決断を経て、福岡ブルックスとしてJ昇格を果たされました、富澤静雄・元アビスパ福岡会長(現株式会社中央防犯会長、以下は普段通り「富さん」と呼ばせて頂きます)、並びに、この間無名に近い選手達を、その能力を最大限に伸ばしながら、時には鬼の如く選手を叱咤し、あるいは、母親の如く共に涙を流しながらチームを率いて来られた、私の藤枝東高校の大先輩・菊川凱夫・元アビスパ福岡総監督(こちらも以下は、普段通り「菊さん」と呼ばせて頂きます)、両氏に敬意を表し、これまでこのような私までも色々とお世話頂き、厚く御礼申し上げます。そして、両氏にはこの間、中には叶わぬ夢もありましたが、私達にそれこそ数多くの夢と感動を与えて下さり、重ねて御礼申し上げます。

1982年に、警備会社・中央防犯の社員の同好会として「中央防犯サッカー部」が創部。

翌83年には、加盟したばかりの静岡県社会人サッカーリーグ中西部3部で、8勝1敗で優勝。1試合平均6.2得点、1試合平均1.8失点。

この優勝には富さんは大変な喜びようで、「よくやってくれた。おめでとう!このお祝いになにか一つあげたいが、何がほしい?」と聞いたそうです。いきなりの社長のその言葉に暫し躊躇した選手達は、お互いの顔を見合わせた後、口を揃えて「監督です!」ときっぱり答えたそうなんです。この余りに純粋な答えに打たれた富さんは、「そうか、分

かった。それじゃ、おまえ達に日本で1番の監督を連れてきてやる。」と約束し、早速懇意にしていた徳谷薬局社長に監督候補探しの相談をしたのです。

藤枝東高校の先輩・徳谷氏を通じて監督就任の要請を受けた菊さんは、早速中央防犯サッカー部の練習を見学。わずか13名の部員。そのうち3人は、中学・高校、あるいは大学を通じて全くサッカーを経験しておらず、ご存知の通り、サッカーは11人ですから、毎試合必ず1人はサッカーど素人が入って戦ってきたんですね。しかも、この部員殆どが夜勤勤務のガードマンをしながら、たとえ下位リーグの中西部3部とはいえ、優勝を果たした、その未知数部分に魅力を感じた菊さんは、「できれば、静岡県リーグ1部まで上げてくれ。」と言う富さんに、「いや、その上の東海リーグまで持って行きます!」と、監督就任を快諾。

菊さんと富さんはこの時、この中央防犯サッカー部を藤枝市で1番のチームに育て上げ、その上はこの藤枝市に譲渡、クラブチームとしてサッカーをリタイアした選手達を指導者として育てながら、少年達のサッカーを指導させていく、そんな夢をも約束していたのです。二人は既に日本のサッカーはもう企業チームの段階を越え、地域に根ざしたクラブチームを目指すべきとの考えを抱いていたのです。84年春のことでした。

この菊さんの中央防犯サッカー部監督就任に驚いたのは、当のサッカー部員達で、自分たちのささやかな願いが、よもや元全日本代表で、しかもあの釜本邦茂・元参議院議員、杉山隆一・元ジュビロ磐田顧問（以下は普段通り「隆さん」と呼ばせて頂きます）と共に、当時の日本サッカー界で大活躍された菊さんの監督就任で実現するとは、思いもよらなかったようですね。勿論、このニュースは当時の静岡新聞にも大きく取り上げられました。

中央防犯サッカー部監督を引き受けた菊さんは、その部員の殆どが夜勤勤務という状態の中、週3回の夜の練習に如何に来させるかという意識改革から始める始末。そして、サッカーは大好きながらも、その世界では殆ど無名なこの部員達を、“上手なプレーヤー”でなくして“いいプレーヤー”に育てるべく、1人1人とサッカーをトコトン語り合いながら、自分で考えるサッカーを徹底指導。

同年84年、静岡県社会人サッカーリーグ中西部2部も、8勝1分ではたまた優勝。1試合平均6.6得点、1試合平均1失点。

翌85年、同中西部1部を9勝全勝優勝。

翌86年静岡県社会人サッカーリーグ2部15勝全勝優勝。

そして遂に、翌87年には、監督就任の時に要請された静岡県社会人サッカーリーグ1部をも12勝3分で優勝。目標の「東海社会人サッカーリーグ」入りの挑戦権を手に入れたのです。しかも4年連続無敗記録をも達成したのです。

勿論、これは選手達の日々のひたむきな練習の努力の賜物であり、さらには、菊さんのそうした選手達への、将来を見据えた“熱い”指導力によるものでもありました。殊、この年の3月、静岡学園高校を卒業し入部したFW遠藤孝弘選手や、当時のトップの日本リーグ・フジタ（現湘南ベルマーレ）に10年間在籍し、6月に加入したMF後藤元昭選手(当時33歳)

らの活躍は、チームをさらに上に向けさせたのではないのでしょうか。

翌 88 年 2 月、東海社会人リーグの入れ替え戦である、2 日間に渡る東海社会人サッカー トーナメント大会では、中央防犯 S C はその力を遺憾なく発揮。2 試合で計 7 得点をたたき出し（うち 5 得点が遠藤選手）、しかも無失点に押さえた、完璧な昇格でした。監督自ら約束した「東海リーグ入り」を最短の 5 年で果たしたのです。これには、さすがの富さんも驚かれたことと思います。

そこで菊さんと富さんは、次なる目標を設定したのです。そう、勿論それは、夢の「日本リーグ入り」だったのです。しかしながら、そのためには僅かに 16 名の部員では長く、しかもレベルの高いリーグは戦い通すことは難しく、また、週に 3 日の練習では、技術向上はおろか、体力すら付かない。かといって、選手はみな、勿論仕事を持ち、しかも、殆どが当直はおろか、24 時間勤務もたびたびあるガードマンというアマチュアなのです。そこで、両氏は初参入の東海社会人サッカーリーグ開幕前に、初めて本格的な選手補強に取り組んだのです。結果、全日空サッカー部（元横浜フリューゲルスー現横浜 F マリノス）から、同部を日本リーグに押し上げた元読売所属の MF ジャイール選手（当時 28 歳、ブラジル出身、執筆当時京都サンガ通訳）ら 13 名を獲得し、菊さんは中央防犯 S C を、当時の静岡新聞の言葉で「オープン攻撃を主体とする攻めのサッカーが身上」のチームに育てていったのです。

同時に、彼らをコーチに、同年 88 年 5 月、これまで事業を展開させて頂いた地域への恩返しに、サッカーの街・藤枝の復活のため、ランカーフットボールクラブを発足させました。

新聞折り込みされた同クラブ生募集のチラシで、隆さんが校長で菊さんが副校長。当時小学生から勝負を賭けた戦術サッカー指導に終始してきた藤枝のサッカーに対して、将来ワールドカップなどの国際舞台で活躍できる人材育成を目論み、長期的展望にたった、年齢に応じた指導を全面に打ち出しておりました。

確かに「サッカーの街・藤枝」を産んだ背景に、スポーツ少年団が果たしてきた役割は多大なものがありました。当時、私の本業の学習塾業界でも然り、生活にゆとりができたのか、あるいは、せめて子どもには勉強ができるようになってほしいと願ったのか、世の親たちは子どもの英才教育に流れ始め、少しでも人よりも早く知識を身につければと、早くから子ども達を塾やお稽古事に通わせ始めておりました。

ところが、一方で、“燃え尽き症候群”の子ども達が現れ始め、小中学生の頃の華やかな活躍が、高校、社会人になるにつれいつの間にか消え、国際舞台では日本のサッカーは全く通用しない。学習面でも同様に、小中学校時に受験テクニック修得に終始した生徒達は、高校の、しっかりした基礎力の上に立った奥深い応用力を必要とする学習について来れなくなっていたのです。

そうしたことから、私はこの募集チラシの文言には、失礼ながら同胞を得た感動を覚え、早速当時年長の私の息子を入校させました次第です。

スクールが開校しますと、私もどんな指導をするのか大変興味がありまして、親ばかながら毎回スクールの練習を見学に行きました。するとどうでしょう、ジャイールコーチや川上コーチ（執筆当時、沖縄出身、アルゼンチン育ち、元エスパルス）らは子ども達の気持ちを見事に掴み、失敗しても叱るどころか、「今度は頑張ろうね。」と激励する。そして、様々なパターンの練習を取り入れながら、飽きさせもせず常に楽しく、何よりもボールに親しむことを徹底指導する。私はただただ感心しておりました。

そんな折、私の長男がコーチを自分の誕生会に招待してしまったと聞き、うちの子ばかりではと、スクールの事務局に相談しまして、スクール生のご父兄に練習場で参加希望者を募り、数家族の皆さん一緒に、コーチ達と昼食会を開いたのです。実は、私はこの時初めてコーチ達が中央防犯サッカー部の選手として、その年の東海社会人サッカーリーグに初参入し、リーグ戦を戦っていることを知ったのです。

その昼食会は、その年 88 年 9 月 21 日（秋分の日）のことでした。その頃我が家では、その年の暮れに産まれる 3 番目の子供のためにホームビデオを購入しましたことから、元来サッカー好きの私ゆえ、ビデオカメラ片手に中央防犯 S C の試合の”追っかけ”を始めたのです。

覚えております。長男を連れ初めて見に行った試合が、清水市三保の東海大学グラウンドで行われた、東海社会人サッカーリーグ後期開幕戦対芙蓉クラブ戦でした。初参入した東海リーグ前半戦を首位で折り返した中央防犯 S C は、前半開始早々の 1 分、MF 大塚選手がドリブルで持ち込みシュート、あっさり先制。しかし、その後は押し気味に試合を進めるも、前半はこの 1 点止まり。さすがの菊川監督も、ハーフタイムにロッカールームから外に漏れ聞こえる程の大きな声で、選手達に檄を飛ばしておりました。

そして、後半半ば中央防犯 S C は、左サイドからの大塚選手からのパスを胸でトラップした、移籍 3 試合目の FW 青木選手（元トヨタ・現名古屋グランパス、当時 29 歳）が振り向きざまにシュート、芙蓉クラブを突き放したのです。

後で菊川監督から聞くに、青木選手はこの日実家のある九州・大分からご両親を招待していたとのこと。勿論、監督はその青木選手をスターティングメンバーには入れず、前半戦を見ていたようですが、仮にも首位の中央防犯 S C の、先制してからの気迫のない試合運びに激怒し、それがハーフタイムの檄だったんですね。後半も始まってもなかなか追加点が奪えない中央防犯 S C に、監督は遂に青木選手を投入。「やっぱりいくつになっても、親には活躍する自分の姿を見てほしいんですよ。それがまんまと当たって、ご両親の前で移籍後初ゴールを奪うとは・・・」と語ってくれた菊さん。

その後、静岡県内で行われた試合は家族総出で車で行ったのですが、確か名古屋での遠征の時だったと思います、身重の女房を家に残し、長男と長女を連れ車で追いかけて中央防犯本社に行くと、菊さんが「どうぞ、バスにお乗り下さいよ。」と声を掛けて下さったん

です。その後も何回か、凶々しくも選手達のバスに便乗させて応援に行かせて頂いたこともありました。そんな時、警備会社ゆえに夜勤明けのままそのまま試合に臨むこともある過酷な状況ながら、「サッカー王国」静岡にあって、毎年各リーグを初優勝・上位リーグ昇格を成し遂げてきたとは思えない、選手達の底抜けに明るく一途な姿に、家族共々益々惹かれていったのです。

そんなコーチ・選手達を少しでも多くの方々に応援して頂きたく、試合毎に試合の結果と次節の試合日程を書いたポスターを作り、それをコピーしては私の運営する学習塾は勿論、ランカーフットボールクラブの練習グラウンドや、塾生の保護者の方が経営するスーパーにも貼って頂いたりしてきました。

しかし、サッカー好きの土地柄ながら、正月の全国高校サッカー選手権大会でも、現在もなお最多優勝回数を持つ藤枝東高校が、私が高校3年の昭和48年の準優勝を最後に当時まで低迷を続け、菊さんも三菱重工退社後所属していた、天皇杯優勝経験を持つ名門・志太クラブも、資金難と人材不足で下位リーグ降格の憂き目にあっており、やはり全国大会で活躍していなければ、藤枝市民は満足しないのです。同じ東海社会人リーグに所属していた藤枝市役所サッカー部との”藤枝ダービー”では、当時唯一全国自治体サッカー大会で優勝を繰り返していたため、観客の大半が藤枝市役所サッカー部の応援に回ってしまい、中央防犯S Cの応援はランカーF Cの数家族の皆さんと選手の家族の方々のみで、なかなか一緒に応援して頂く方々を増やすことができない状態が数年続きました。

そう、思い出します。東海リーグ時代の、当時は物静かな応援団の中であって、ひととき元気なおじさんがおりました。中央防犯S C主将・若林由幸選手（1990年当時25歳、福岡移転を機に引退）の義理のお父さんです。娘さんが同選手とお付き合いを始めた高校時代から、試合のたびに娘さんと一緒に若林（旧姓松浦）選手の応援に出かけていたとのこと。実に微笑ましいご家族です。そのお父さん、東海リーグの試合の時も、しーんとした試合開始とハーフタイムには必ず大きな声で、「ヨー、よっちゃん！がんばれよー！」と声援を送り、周りの応援団の人達を和ませてくれました。

そんな娘婿の応援に熱心なこのお父さん。1990年10月の対ヤマハクラブ戦で、婿の若林選手が相手ヤマハクラブの選手にファウルされるや否や、あの現ジュビロ磐田スタジアム（当時はバックスタンドのみでしたが）を駆け下りて、観客席最下段から、「てめえー、わしの大事な息子に何をすんだ！」とヤマハ選手にかみつきの、遠藤選手に制せられたことがありました。そのものすごい剣幕に当のヤマハ選手もびっくり、謝ることも忘れてしばらくあっけにとられておりました。

この日は時折激しいにわか雨の降るあいにくの天気で、だだっ広いスタジアムに観客は、そのお父さんと私の家族に、ランカーフットボールクラブ生の1家族の、たった10名。当時の東海社会人サッカーリーグの試合では、そんな状態が普通だったんですね。ちなみにこの日の試合は、MF大塚選手（当時30歳・拓大出）の30mほどの超ロングシュートの先制点を含め、3対0でジュビロ磐田の2軍・ヤマハクラブを圧勝しております。

その年暮れ、天皇杯本大会に初出場した中央防犯S Cは、1回戦古河電工(現ジェフ市原)と対戦、善戦したものの、0対1で敗退。

翌89年3月、これまで「挫折を知らなかった」(日刊スポーツ)中央防犯S Cは、夢の日本リーグ入りを目指して、地元藤枝市民グラウンドで行われた全国地域リーグ決勝大会予選リーグに参戦しました。しかし結果は、1勝1分け、得失点差で僅かに及ばず、決勝リーグ進出なりませんでした。

この年の東海社会人サッカーリーグも、9勝2分1敗で準優勝に終わり、中央防犯S Cにとって初めての”足踏み”となったのです。

同年89年と90年の東海リーグでも、それぞれ9勝1敗2分と9勝5敗2分で連続準優勝に終わり、毎年優勝を重ねてきた中央防犯S Cは、初めてリーグ戦無冠に終わりました。

これに奮起したのか、89年の全国社会人サッカー選手権大会で見事に初出場、初優勝を成し遂げた時は、菊さんをして静岡新聞に「このチームは日本一仕事が過酷なアマ。それを乗り切って勝ったんだ。すばらしい。」と言わしめたのです。更に、中央防犯S Cは翌90年の同全国社会人サッカー選手権大会で史上初の連続優勝を果たし、その底力を全国に見せ付けたのです。

この時電話で連続優勝を確認し、深夜11時過ぎ藤枝駅に駆けつけたところ、20名程の中央防犯社員が出迎えに来ており、寂しく凱旋した中央防犯S Cの連覇を祝し、大声で万歳三唱。そのあと大きな荷物のジャイール選手と菊さんを自宅までお送りした車の中で、目に涙を浮かべながら「ほんとによかった。彼らをここまま無冠に終わらせたくなかった。」と、菊さん。ついこちらも目頭が熱くなったことを覚えています。

この90年全国社会人サッカー選手権大会第2回戦対三菱化成黒崎戦で、「G K 藪崎選手のアシスト」という珍しい記録が残っております。土砂降りの雨の中、前半2対0でリードした後半戦、さらに2得点追加した中央防犯S CのG K 藪崎選手の蹴り上げたボールが、折からの強風に乗って相手ペナルティエリア内にポトリ。飛び込んだF W青木選手が蹴り込み、5点目。その後も中央防犯S Cは、力を抜くことなく得点を重ね、結局この試合、8対0で圧勝でした。

「まさか自分がアシストするとは思いませんでしたよ。当時話題のコロンビアのナシオナル・メデジンG K・イギータもびっくりでしょうね。今度は、G K初ゴールでも。」と笑って話してくれた藪崎選手でした。

実は、菊さんや選手達以上に熱く、そして強い思いで、日本リーグ入りへの「2度目の正直」に賭けた男がいたのです。そう、それは勿論のこと、富澤中央防犯社長(以下は普段通り「富さん」と呼ばせて頂きます)だったのです。富さんは、選手の殆どが「24時間(休憩4h)勤務→当直(17:30~8:30)→当直→休日」という勤務体系の中、史上初の全国社会人サッカー選手権大会連続優勝を成し遂げ、2度目の日本リーグ入りを目指す全国地域リーグ決勝大会の出場権を得た選手達に、「菊さんの監督就任」に続いての”ビッグなプレゼント”を心

密かに準備していたのです。すなわち、富さんは、選手達が社長自ら菊さんに示した「静岡県リーグ1部優勝」を果たしてくれた87年の暮れのこと。専用練習施設もなく、藤枝東高校など近くの中高校グラウンドを借りながら夜間練習をしてきた選手達のために、なんとサッカー専用グラウンドの建設を計画したのです。そして、翌88年には藤枝市宮原の市街化調整区域に土地を取得し、開発許可を得て、89年春から造成・建設工事に着手。遂に、90年8月に、総面積約二万平方メートル、メイン、サブコート各1面、スタンド、夜間照明、散水器、放送、駐車場も完備した「中央防犯S C宮原グラウンド」が完成したのです。選手は勿論、この”ビッグなプレゼント”には大変な喜びで、菊さんの監督就任に続く”2つ目の驚き”でもありました。選手達はこの日、自分たちで勝ち得たグラウンドの石拾いをしながら、菊さんと共に、「次は日本リーグ入りをして、ローン（芝）コートにしたい。」（スポニチ紙）と誓ったのです

この頃になりますと、こうした中央防犯S Cの活躍に、応援する方々も中央防犯やランカーフットボールクラブの関係者を中心に徐々に増え始めてきました。吉田町の山崎さんは、練習試合にもいつもおばあちゃんも一緒にご家族全員で応援に来て下さったり。手作りの大旗を手にとどこでも一緒に応援に行っていた岡部町の長谷川さん。ブラジルから来た選手の若い奥さんを自身の経営するお店で雇って頂きながら、二人を我が子のように面倒見て下さった藤枝市の松山さん。先ほどお話したG K藪崎選手のお母さんの知り合いで、得点を入れる度にいつも派手な扇子を片手に踊り出す、「ジュリアナ母さん」こと、三浦光子さん。三浦さんは、95年3月、のちの福岡ブルックスのJ昇格を夢見ながらクモ膜下出血のため急逝なさいました。また、この頃から富さんの次男も父に触発されたのか、当時「福岡ブルックスのJ1優勝を見届けるまで応援しよう！」と、私設応援団を結成。この応援団に加わり、同じくのちの福岡ブルックスのJ1優勝を夢見ながら永くこのチームを応援し続け、翌96年職場での事故で他界した南條君（享年28歳）もおりました。当時からご一緒に応援下さった方々はそれこそ熱心で、スクールのご父兄の皆さんと企画した応援バスツアーも、乗り心地の悪いスクールバスでも喜んで参加下さり、計画の不手際で赤字を出してしまった時も、皆さんは進んでご援助下さり、本当に感謝しております。

また、この頃試合会場に行くと必ず相手チームの大きな横断幕が目に入り、何にもない中央防犯S Cの応援席が寂しく感じ、スクールのご父兄の藤田さんに相談しまして、中央防犯S Cとスクール共有の横断幕を作ることにしました。と言いましても、資金のない私達ゆえ、その資金はスクールのご父兄を中心に、試合会場に応援に来て頂いた皆様にも遠慮もなくカンパをお願いして集めました次第です。こうした皆様のご協力で5万円の制作費が集まり、同じく当時から中央防犯S Cを応援し下さっております、ご父兄の勤め先・(株)小宮人形社長さんのご協力を頂きまして、ようやく「中央防犯・ランカーF C」と書かれた横断幕が完成致しました。ところが、その横断幕に書かれた制作団体名・ランカーF C父母の会の「F C」の2文字が抜けてしまっていたことから、(株)小宮人形の社長さんが染屋さん

に「FC」を入れた幕をもう1枚作り直すように指示して下さり、5万円で2枚の横断幕ができてしまいました。儲かったような、申し訳ないような複雑な気持ちでしたが、その後の試合にはいつもこの2枚の横断幕が飾られるようになり、特にアウエー試合の数少ない応援にあっては、中央防犯SCの選手の皆さんには、少しの心の支えになって頂いたのではと思っております。

試合で撮影したビデオは、ダビングして中央防犯SCにも差し上げ、選手の皆さんや菊さんから喜ばれ、時折試合後、選手達から飲み屋にも誘われ、サッカー談議に朝方まで花を咲かせたこともありました。特に酒は体質からこれっぽっちも飲まれない菊さんとは、コーヒー一杯で4時間もサッカーのお話を聞かせて頂いたこともあります。

そう、その時です。菊さんから、生き別れになった父親に、得意のサッカーで全国的に有名になって自分の姿を見せつけてやれと、我が子のように育ててきた遠藤選手のことを初めて聞かされました。J昇格の3年前母親も亡くし天涯一人になったその彼は、J1年目の5月にJ初ゴールを決め、その菊さんの言葉を実現してしまったのです。これこそ彼の努力の賜であり、菊さんの指導の結晶です。

話はもどきまして、90年の東海社会人サッカーリーグを9勝2分5敗で2年連続準優勝で、創部以来はじめての精彩を欠いたリーグ戦を振り返り、確かにレギュラーの平均年齢は29歳に近くになり、衰えが見え始めたチーム力を経験でカバーし、「2度目の正直」(日刊スポーツ)にチャレンジする中央防犯SCを率いる菊さんは、翌91年1月、創部以来初めて6日間の合宿を行い、選手達に悲願の日本リーグ入りに賭ける意気込みを示し、選手達の執念をも引き出そうとしたのでした。

そうして挑んだ同年3月1日、全国地域リーグ決勝大会予選リーグ初日、対NTT四国戦は1対1の引き分け。しかし、翌2日目は、この引き分けに選手達が奮起し、遠藤選手2ゴールの活躍で3対1京都府警を下し、ようやく決勝リーグ進出を果たしたのです。

そして2週間後の3月15日、愛知・刈谷港町グラウンドで始まった、4チーム総当たり戦の同大会決勝リーグ初日、中央防犯SCは最も組みやすいと見られていた大蹴球団に、強風にも悩まされ、またしても緊張感からか決定打を欠き、0対0の引き分け。この引き分けは敗戦に等しかったのです。

翌2日目、「奇跡だ。雨に沈んでいた中央防犯ベンチが、起死回生の一発に沸き返った」と日刊スポーツ紙を驚かせた、対東京ガス戦。前日はなんと4チームとも0対0の引き分けで、日本リーグ昇格のためには、この日は絶対負ける訳にはいかない中央防犯SCは、日刊スポーツの言葉を借りれば、前半、怒涛の攻撃を見せるも決めきれず、共に無得点。風下に回った後半は、劣勢に立たされた中央防犯SCは、再三のピンチを乗り切ったが、32分について先制ゴールを許してしまったのです。そして、点取り屋のアギナウド選手が左足捻挫でリタイアした上、ベテラン後藤選手も後半早々、持病の左足太股肉離れが再発し、戦線離脱。さらには、先制された直後、FW川上選手がゴール前の競り合いから額をバッティン

グし、包帯を巻きながら突破を試みる状態に。

「後藤が抜けた時に不安が走ったが、あの状態でよくあそこまで持ったよ。」と、菊さんも脱帽。そう、そんな極限の中、後半 39 分、右 45 度からジャイール選手の F K がゴール前混戦から左に流れたところを、大塚選手がキープ。ゴールラインぎりぎりまでドリブルで持ち込んでフワリと浮かすと、ベテラン青木正英選手(当時 31)が奇跡的なヘディングシュートを決めて、1 対 1 に追いつき、連日の引き分けでまさに首の皮 1 枚で、最終・西濃運輸戦に待望の日本リーグ入りの望みを繋いだのです。

そして、その最終日 17 日、前の試合で東京ガス(現 F C 東京)が 3 対 2 で大阪体育大蹴球団を下し、勝ち点 4 で先に日本リーグ入りを決め、2 分け勝ち点 2 の中央防犯 S C は、1 勝 1 分け勝ち点 3 の西濃運輸に勝たなければ、悲願の日本リーグ 2 部に昇格できないという状況に追い込まれたのです。

前日と同じく、寒風吹き荒れた愛知県刈谷市港町グラウンド。主力の MF ジャイールはイエローの累積で出場停止。おまけに、FW 陣レギュラー 3 人が風邪で高熱を押しでの出場。ところが、中央防犯 S C はそんなビハインドを見事にはねのけ、それまで引き分けこそあれ、リーグ戦では一度も勝ったことのなかった宿敵・西濃運輸に、前半 4 分の大塚選手(当時 30 歳)の決勝ゴールを全員で守りきり、1 対 0 で日本リーグ昇格を決めたのです。

この時は、さすがに菊さんと選手全員、お互いに抱き合い、グラウンドに崩れて伏してのうれし泣きでした。その彼らを両腕で抱えながら優勝を讃えた富さんの顔にも、うれし涙が夕日に光っておりました。応援に駆けつけた私達みんなも、感動の貫い泣きでした。富さんは、この日から 1 週間、これまでの選手達の労をねぎらい、選手達がどこの店でどんなに飲み食いしてもすべて社長がお金を出すとまでして選手達を讃えたのです。そんな富さんの男気に惚れたと、のちに菊さんが私に語ってくれたことがあります。北海道生まれで単身でここ藤枝に乗り込みで事業を興して、ここまでその会社を成長させて頂いたその恩返しにと、「サッカーの街・藤枝」の復活を実現しようと、これまでチームを支えてこられた富さんを知ったのもこの時でした。

さて、そうして勝ち取った 91 年第 20 回日本リーグ 2 部開幕の前に、中央防犯 S C は、清水 F C(現清水エスパルス)入りした川上選手とブラジルに帰国したアギナウド選手に代わり、韓国 D F ・李選手らを獲得し、迎えた開幕戦の対甲府クラブ(執筆当時 J 2 ヴァンフォーレ甲府)戦。先制点を許すも後半盛り返し、遠藤選手の連続 2 得点などで 3 対 1 と逆転、初戦、初勝利を納めるかと思われた残り 2 分で 2 点を許し、惜しくも引き分けに終わったのです。

この試合、数年前からチームのマネージャーを手伝っていた”小菊ちゃん”こと、菊さんの息子さんと菊川さんが 3 対 2 と追い込まれてきたチームに興奮し、ベンチでなんと”親子喧嘩”を始め、後藤コーチに制せられる場面もありました。

しかし、初参入の日本リーグ 2 部も第 8 節焼津市陸上競技場では、中央防犯 S C は、あ

のジーコ選手が加入した住友金属（現鹿島アントラーズ）に、ジャイール選手のPKで先制し、六千もの観衆を湧かせたものの、ジーコ選手のヘッドシュートなどで1対3と逆転され、結果、7勝6分17敗で16チーム中12位の成績で終わったのです。

93年5月15日に、サッカーをするすべて選手達が憧れたプロのサッカーリーグ・Jリーグが開幕することを受け、92年、日本リーグも1・2部に所属する10チームがJリーグに参加したため、新たに10チームずつのジャパンフットボールリーグ(JFL)1・2部に改組され、中央防犯SCはチーム名に藤枝を冠して、「ACM藤枝SC」と改称、前年のJSL2部の成績から、JFL2部(J2)に所属することになったのです。その第1回JFL2部(J2)の開幕が7月5日になったため、例年の半分以下の僅か1カ月半のオフの間に、ACM藤枝SCは、これまでチームを引っ張ってきた32歳の司令塔・ジャイール選手は、日本人帰化と同時に現役を望み、京都紫光クラブへ移籍いたため、全日空からFWピッコリ(当時27歳、元アビスパ福岡監督)、MFホルヘ(当時30歳)、DF森重(当時27歳)の3選手を獲得しました。さらに、李選手に代わり韓国から朴選手を獲得。菊さんと富さんは、大満足のこの戦力補強と前年のチームの戦績分析に、密かに記念のJ2初代チャンピオンを目論んだのでした。

そのため、菊さんはこのリーグ優勝の目標を選手達にはっきりと示すためにも、試合中、特に緩慢なプレーには厳しく指導。常に勝利に拘った指揮を執ったのです。それが時に、DF石上選手(元アビスパ福岡監督)と試合中に、動きのことでけんか腰に言い合ったり。また、ある試合では勢いPKを取られた主審の判定に執拗に抗議し、退場を宣告され、その上試合後、公式記録に署名を求められた際、あのPKは認めない旨の一言を書き、署名。更に、帰ろうとしてタクシーを待っている間に、同じくタクシーに乗りに来たその主審に、再び抗議し、この3の件がその後のJ1運営委員会で取り上げられ、各2試合ずつ計6試合の監督のベンチ入り禁止処分を受ける程の、“悪しき”熱血漢振りを示したのです。また、ある時は、試合中、ACM藤枝SCの選手に危険なバックチャージを掛け、警告を受けた相手選手に向かって、「てめえー、うちの子に何をするんだ！」と怒り、たまたま手にしていた小指の頭ほどの小石をほうり投げたところ、なんとそれがその選手の体に当たり、これまた退場処分。「いやはや、これらばかりは監督失格ものでしたよ。」と反省する菊さん。しかし、「監督自ら真剣勝負を挑めば、自ずと選手達も・・・」と言う菊さんの気持ちが選手達に伝わったのか、ACM藤枝SCは、開幕戦・対京都紫光クラブ戦を1対2で惜敗したものの、第2節から3連勝を果たしたものの、第5節対NTT関東戦に0対1と足踏み。ところが、第6節対甲府クラブ戦から、焼津市出身でフジタSC(執筆当時ベルマーレ平塚)所属していたFW久保山選手(当時27歳)が加わり、FW遠藤選手はこの試合で、その久保山選手のアシストによるJ2初のゴールを含め2得点を挙げ、ピッコリ選手のハットトリックもあって、5対1と大勝するなど、前年とはうって変わって快進撃を続けました。遂に第11節には京都紫光クラブを4対2で破り首位に立ち、その後も遠藤、ピッコリ両選手の活躍に、ベテラン青

木選手も奮起、久保山選手も度々得点に絡み、一時は首位も危なくなっただけでもありませんでしたが、そこはチーム力と精神力でしのぎ、第17節今季最後のホーム試合・対コスモ石油（元JFLコスモ四日市、廃部）戦を、遠藤選手のJ2初のハットトリックで4対1で勝利し、首位を守り続け、遂にJ2Vに王手を掛けたのです。

そして、迎えた最終第18節対西濃運輸戦、18試合フル出場を果たした遠藤選手は、前半19分と34分の久保山、ホルヘ両選手の得点に初J2制覇の重圧も抜け切れ、所狭しと動き回り、自らも後半15分、久保山選手のアシストで今リーグ通算16得点目を挙げたのです。更に後半30分に、久保山選手がこの試合2得点目を叩き出すと、遠藤選手も、そしてチームメイトみんながJ2制覇を確信、試合終了を告げるホイッスルに、スタンドで観戦していた富さんも思わず両手を高々と上げ、記念すべきJ2初代チャンピオン達の勇姿に拍手を送っていたのです。夕日の映える各務原のグラウンドに舞い上がるACM藤枝SCの選手達。

ポスター貼りにビデオ撮影と、試合の追っかけを初めて5年、日本に遂にJと言うプロチームが誕生。私はこの時かすかに燃え始めた希望の火を見つけ、この火を何とか藤枝で煌々と燃え上がらせたい、そんな希望を抱き始めました。試合のビデオを撮り続けてきました私も、この日ばかりは撮影にはなりませんでした。カメラマンであることを忘れ、つい自分が試合に見入ってしまい、カメラはあらぬ方向を撮影。感動の岐阜・各務原の夕焼けは、今でもはっきりと覚えております。

この年、初J2の得点王にピッコリ選手・18得点、その第2位に遠藤選手・16得点、リーグのアシスト王に、ジャイール選手を上回るテクニシャン・ホルヘ選手になり、遠藤、ピッコリ、ホルヘ、若林（主将）各両選手は、J2ベストイレブンにも選ばれたのです。

遂にJ1。トップの日本リーグに入ったと思いきや、J誕生でまた一步増えた階段も、あと一つ。小さい頃から、父親に捨てられた悔しさとその父親に会いたいささやか願いから心静かにJを目指してきた遠藤選手にとって、日本のいづこからでも分かる舞台に自分が立つのも、もうその向こうだ、と。ここまでともに戦って来たチームメイトそれぞれが、それぞれの思いでここやってきたように、彼は多分、そう考えていたにちがいないと思います。それが彼、遠藤選手をして、ここまで突き進ませてきたものではなかったかと、私は思っております。

記念すべき初代J2チャンピオンに輝いたACM藤枝SCは、その勢いでその年11月、第72回天皇杯全日本サッカー選手権大会東海予選で、1回戦東海リーグのジャトコを4対2、2回戦J2のコスモ石油を2対1で下し、2回目の本大会出場を決めたのです。

その本大会第1回戦（92年12月5日）は、J1所属の東芝（現コンサドーレ札幌）と対戦、互いに点を取り合う壮絶な試合となりました。先制したのは、ACM藤枝SC。前半8分、右サイドにドリブルで持ち込んだ静岡学園高校の先輩・久保山選手が中央に折り返し、それをピッコリ選手が背後から走り込んできた遠藤選手にスルー。東芝DFがピッコリ選手に引かれ、ノーマークとなった遠藤選手はこれを右足で決め、1対0。その1分後、今度はその久保山選手が右ペナルティエリア付近から豪快に蹴り込み、2対0。その後同14分

に東芝に返されたが、同 37 分、今度はピッコ選手のアシストを受け、遠藤選手が自らの 2 点目を決め、3 対 1。しかし、同 42 分に東芝・バラン選手に決められ、3 対 2 で前半を折り返したのです。そして、後半 9 分、再び久保山選手が、今度は右サイド浅い位置から正面の遠藤選手にパス。遠藤選手はこれを受け、体を反転させながら東芝 DF を交わし、今度は左足で蹴り込み、ハットトリックを達成。ところが、ここは 1 人の退場者を出しながらも J1 の意地を見せた東芝。同 18 分、39 分と、東芝・バラン選手もハットトリックを決め、4 対 4、延長に持ち込まれたのです。延長前半は互いに得点を挙げられず、後半 3 分、遂に東芝に逆転され、4 対 5、万事休す。しかし、ここから脅威的な粘りを見せた A C M 藤枝 S C。同 8 分、石上選手のスルーパスに反応したホルヘ選手が決め追いつき、ロスタイムに入った直後、再び久保山選手が右サイドから折り返したボールに、遠藤選手は東芝 DF ともつれ合いながら、スライディングシュート。「なんとしても 2 回戦で清水エスパルスと対戦したかった」と言う遠藤選手の会心の 4 得点目で、劇的な勝ちを収めたのです。

そして、迎えた翌 12 月 6 日第 2 回戦、対清水エスパルス戦。オレンジ色の大応援団に埋め尽くされたスタンドの中、僅かに 50 数名、青色の小旗を振る応援団に見守られた A C M 藤枝 S C は、後半 23 分に三浦泰年選手に頭で決められ、0 対 3。先輩・三浦選手のマークを受け、プロの強さを存分に見せつけられた遠藤選手は、その 6 分後、プロチームを相手に強烈にその力をアピールしたのです。ドリブルで右から持ち込んだ遠藤選手は、右ペナルティエリア外で清水 DF ・平岡選手のスライディングタックルに右足を蹴られ、フリーキックを得たのです。そして、ホルヘ選手の上げたそのフリーキックに遠藤選手は、ピッコリ選手の陰から相手 DF の間げきをぬって綺麗に頭で合わせ、遂にプロに一矢を放ったのです。「プロとは体力と筋力が違い、当てられてどれだけ自分が踏ん張れるかが課題」(報知新聞)と、先輩・三浦選手のマークから学んだと言う遠藤選手。三浦選手から、「バネがあり、シュート感覚も鋭い。もっと上を目指せる選手。プロで戦ってみたいね。」(同紙)と声を掛けられ、「もし誘いがあれば考えたいと思う。」(同紙)と漏らした遠藤選手。華やかな J リーグの開幕に、やはり彼、遠藤選手もプロに憧れ始めていたのです。試合はその後、清水・ミランジーニャ選手にハットトリックを決められ、1 対 4 で敗退。しかし、この試合で、「今までこんなに厳しいプレッシャーを受けたことはなかったと思う。これは体験して、初めて理解できるもので、どこが足りなかったか、補うにはどうしたらよいか分かったはず。」(静岡新聞)と菊さんがおっしゃったように、遠藤選手も、そして、他のイレブンも、大変大きなものを学び取ったのです。

そして、遂に J リーグ開幕の 93 年、A C M 藤枝 S C は、愛称として「藤枝ブルックス」を名乗り、元韓国代表 DF ・曹(チョウ)敏国選手らを獲得し、J 準会員のベルマーレ平塚、ジュビロ磐田、柏レイソルが J リーグ目指す J リーグ直下の J 1 に、いよいよ初参入したのです。

しかしながら、藤枝市民の反応は相変わらず鈍く、観客も以前よりは増えたものの、とて

も Jリーグには何百分の一にも及ばない状態でした。しかも、やはり J1 の壁は厚く、藤枝ブルックスも開幕 3 連敗を喫してしまったのです。そして、迎えた柏レイソル戦の焼津市営陸上競技場。なんと、ピッコリ（元アビスパ福岡監督）の PK・Vゴールで快勝、地元・藤枝は沸き上がりました。そして、その翌々節のホーム・サンガ戦での 2 勝目を機に、私は何とかこのチームの応援を増やしたく、当時サッカースクールのご父兄でした阿形さんにご協力頂き、「ランカー F C 父母の会」の名で「ランカーしんぶん」を発行したのです。ポスターだけではこのチームの知ってもらえない。ならば、当時本業の学習塾で毎月新聞を発行していた経験から、自分にできることはやはりこれしかない、今もお取り引き頂いております印刷所に頼んで、1000 部 6000 円で、ワープロ版下に自分で撮った写真を入れた創刊号（B4 ペラ両面印刷）を発行し、近くの書店やコンビニに置いて貰ったのです。これが予想外に反響を産み、2 号目からは早速広告スポンサー（当時運営していた塾の塾生の父親が社長を務める「静岡田村薬品株式会社」様）が現れ、以後翌 94 年 4 月まで「ランカーしんぶん」として通算 11 号を発行させて頂きました。試合の時はチアホーン片手にホームビデオで試合を撮影。それを元に仕事の合間の数日間、半ば徹夜に近い状態での作業をしながら、「大変でしたね。」なんて言われましたが、いいえ、本当に楽しく作らせて頂きました。「ランカーしんぶん」はその後、後援会の支援も受け、「後援会広報担当責任者」の名で、「ザ・ブルックス」「THE アビスパ」と名を変え、通算 47 号発行させて頂きました。

話は戻って 8 月 8 日、第 12 節では満員の藤枝市民グラウンドで、前対戦の第 5 節で 0 対 8 の屈辱の試合を強いられたジュビロ磐田を、後半 39 分のピッコリ選手の決勝点で下し、5 勝目を挙げたのです。結果、藤枝ブルックスは初 J1(JFL)を 6 勝 12 敗、10 チーム中 9 位の成績で終わりました。前述の天皇杯本大会での活躍で、一部マスコミに Jリーグチームへの移籍かと話題に上り、冷静に対応していたものの、その憧れに揺れ動いた遠藤選手は、第 8 節対東京ガス戦で J1 初得点を挙げ、古傷の腰痛による 1 試合欠場を除いて、17 試合フル出場し、7 得点の活躍を残したのです。

この年、J2 第 2 位のジュビロ磐田が、静岡県内 2 チーム目として Jリーグ昇格を確実にし、益々高まる人気の Jリーグに、9 位ながら前述のように、柏レイソル、ジュビロ磐田らの大物喰いを発揮した藤枝ブルックスに、当然のように周囲から、その昔サッカーの街として全国にその名を轟かせた藤枝からの Jリーグチーム誕生の夢を託され、リーグ半ば頃より、富さんの苦悩が始まったのです。遠藤選手にしても然り。サッカーをする者、みんなが憧れるように、彼もリーグ終了後、Jリーグチームから正式に移籍の誘いがありまして、やはり自分を Jリーグで試してみたいという思いが益々高まり、まずはこれまで自分を育ててくれた菊さんと富さんと、相談したのです。これまでのご恩に揺れ動き悩みながらも、やはりそこは自分の人生、彼は「藤枝ブルックスとプロ契約なら残留、社員契約ならオファーチームに移籍」という結論を伝えたのです。

その年 10 月、富さんは遂に藤枝ブルックスのプロ化を決意し、94 年 1 月には、オルギン

をヘッドコーチに迎え、トログリオ、マジョール、富島、竹元、磯田、其田、宮村、梅山、古邊、佐野各選手らとプロ契約を結び、Jリーグ入りを明確に打ち出したのです。当然、遠藤選手、藤枝ブルックス双方もこのプロ契約に同意し、遂に自分を育ててくれた菊さんと富さんのもと、しかも自分が生まれ育ったこの藤枝の地でJリーグを目指すことになったのです。

しかしながら、この年、J準会員の柏レイソルを4対3で競り勝った5月22日、この間藤枝ブルックス後援会と藤枝市長とで水面下で進められてきたJ規定のホームグラウンドの早期着工交渉が決裂、福岡県民50万余名の署名に大きく動かされ、富さんは苦渋の思いで藤枝ブルックスの福岡移転を決意したのです。選手達も富さんの決断に、その年の第3回JFL(J1)でJ準会員のセレッソ大阪、柏レイソルに続く第3位の成績を修め、その意を強く示したのです。この選手達の底力を見たオルギン・ヘッドコーチは、翌年監督に就任し、1年でJ昇格を果たすため、菊さんが思わず制す程の、まさに血反吐を吐く練習を選手達に強いら、「リーグ1番の練習に耐えてきたからには、それ以下の練習をしてきた相手には絶対に負けられない」との強い精神を選手に植え付け、その95年JFL1部(J1)を24勝6敗(得失点差+58点)で見事に優勝を果たし、J昇格を果たしたのです。

しかし、その陰でこれまで永く中央防犯SC→ACM藤枝SC→藤枝枝ブルックスしかし、その陰でこれまで永く中央防犯SC→ACM藤枝SC→藤枝枝ブルックスで戦ってきた主将・若林選手、大塚選手、吉田選手などの殆どの選手はプロ契約ができず、翌95年の藤枝ブルックスの福岡移転に伴い、藤枝に残留。彼らの目前にあるJへの想いをずっしりと背負ってきた菊さん。それはここでは筆舌に尽くしがたいものです。そして、その間に後援会の私の元に届けられた何千通もの藤枝市民からの手紙に、藤枝ブルックスとして藤枝ホーム最終戦で、藤枝市民グラウンドから溢れんばかりの1万人を超す藤枝市民の惜別の涙。

97年Jリーグに参戦したアビスパ福岡は、99年に2部制になってから、J2降格、数年でJ1昇格するも1年でまたJ2降格を繰り返し、スポンサーも減り、資金難がささやかれ、2008年の暮れの西日本新聞の「どうする！アビスパ」が連載されたました。

そこで、私は翌09年2月と4月に福岡に出向き、藤枝ブルックス時代に知り合い、アビスパ福岡を福岡移転前の藤枝ブルックスから知る田中耕・西日本新聞社デスク(当時、以下当時の呼び名「耕ちゃん」にさせていただきます)や菊さんと色々と話し合いました。その時、菊さんの藤枝への不義理に苦しむ心情にも触れ、胸を締め上げられる思いでした。帰藤後も、週に3,4回夜連絡を取り合い、しっかりした構想を持ったチーム統括(GM)やそれを実践する監督、それを支えるスポンサー等、色々と策を練り合いました(とは言っても、私はその分野は蚊帳の外でしたが)。そこで、藤枝時代からアビスパ福岡を熟知し、地元幅広い人脈を持ち、長年の取材経験で培ったしっかりしたクラブ構想(「オール九州、オール福岡」)を抱く耕ちゃんに半ば強引に同意を得て、私は杉山隆一氏に、菊さんが森孝慈・元アビスパ福岡監督(2011年7月17日逝去、享年68。Jリーグ創設に関わった森健児氏は兄)にお見

舞いに東京に出向いた折お願いし、耕ちゃんのアビスパ福岡役員への推薦書を書いて頂き、9月それを持って、当時アビスパ福岡の人事権を持つと聞いた某氏（2021年逝去）に会い、再び福岡に向かいました。そして、菊さんと耕ちゃんと会って策を再確認した翌日午前、某氏に直談判、推薦書を受け取って頂きました。それから今でも覚えております11月23日の勤労感謝の日、祝日ながら掛川市内のファミレスで社の運営会議をしておりましたら、私の携帯に某氏から連絡がありました。「本日アビスパの取締役会が開かれ、耕の常務取締役就任は承認された。しかし、社長について難航しているんだ。ある役員から耕を強く推してきた君はどうかとの発言があり、他の数人からも打診してくれと言われたんだが、少し考えてくれないか？」と。運営会議どころではありません。勿論、「無理です」と答えたものの、「でもさあ、ちょっと正月まで考えといてくれよ。」と電話が切れてしまいました。すぐに会議を取りやめ延期して、社に戻り、耕ちゃんや菊さんにその旨を伝えたところ、両氏は驚くことはありませんでした。えっ？私の認識では、社長は資金集めが仕事。福岡に地の利のない私には当然無理なことです。しかも、ちっぽけな会社や法人は運営してても、アビスパ福岡なる数百億の大会社の運営は到底できるものではありません。悶々としたまま年が明けた1月7日、また某氏から私の携帯に電話が入りました。「ああ、山下君、見つかったよ、社長が。チームに関わっていた電通九州大分支社支社長の大塚君が、自分から社長をやらせて下さいと申し出てくれたよ。ひとまずよかったよ。胸を撫でおろした次第です。（この経緯については、「アビスパ再生への道」として記録し、再生した折には公表しようと、菊さんが話されていたので、ここで公表させて頂きました。従って、2010年3月の講演ではお話ししておりません。悪しからず。）

アビスパ福岡の危機については、某氏や私達のみならず、勿論多くの方々はその打開策をさまざま模索してこられ、そうした多くの方々の努力によって、本年（10年）1月、アビスパ福岡の経営陣が刷新され、大塚社長一田中常務体制になりました。

最後に、以下に述べます私、藤枝市民の想いを、この（3月）4日に新しくなりましたアビスパ福岡の若い経営陣の皆様と共にお読み頂き、改革を進めていこうしております大塚社長一田中常務体制になったアビスパ福岡をしっかりと支え、まずはJ1復帰まで、たった数試合の成績に右往左往することなく、強く、且つ、永く応援して頂きたく思います。そして、あの藤枝ブルックス福岡移転に署名して下さった50万人の半分の25万人でも結構です。その皆さんがその責任として、たった1000円アビスパに募金して下さったら、2億5千万円の資金が集まります。そうしてアビスパ福岡を支える提案をさせて下さい。宜しくお願い致します。では、お読み下さい。

アビスパ福岡を憂う

「サッカーの街・藤枝」から藤枝ブルックスを誘致した福岡市民と福岡県民に、そして、福岡市と福岡市議会に、更には福岡の企業の皆様に、アビスパ福岡をプロのサッカーチーム

として生き返らせる熱意はないのですか？

人の子であれ、Ｊリーグチームであれ、その育ての苦しみは、その産みの苦しみを経験した者こそが、その苦しみが深い愛情となって克服できるものです。また、この子を、このチームを、何とか一人前に、プロチームに育て上げようとする滾る（たぎる）熱意が、その育ての苦しみを乗り越えられます。30余年（2010年当時）もの間、サッカーチームのみならず、非行、不登校、引きこもりといった様々な青少年達と向き合ってきました私は、そのことを強く感じております。しからば、今のアビスパ福岡存亡の危機に際し、大変失礼ながらまさにその産みの苦しみをご存じではないアビスパ福岡のスタッフの皆様、選手の皆様、ひいては140万人もの福岡県民の皆様に、その苦しみを分かち合って頂き、滾る皆様の熱意とお力で、アビスパ福岡をＪリーグの理念に根ざしたプロのサッカーチームとして生き返らせて頂きたく、藤枝の地で20年余（勿論、2010年当時）の間このチームの虜になって応援してきた者として筆を執りました次第です。

勿論、その「産みの苦しみ」は、1982年の中央防犯サッカー部創部以来、静岡県社会人サッカー中西リーグ3部から1994年のJFLまで、11年もの長きに渡り各リーグを戦い抜いてきた数多くの選手達の想いであり、またその中でＪリーグ入りを直前にして菊川総監督（当時）が断腸の思いで藤枝に残してきたまさしくJFL戦士達の、また、そうした選手達と共に、中央防犯サッカー部→藤枝ブルックス→福岡ブルックスを懸命に応援してこられたご家族、社員の皆様、そして、実に多くの藤枝のサポーター達の、厚く熱い、かつ、どうすることもできない無念の想いでもあります。その中には、アビスパのＪ優勝を夢見ながら、無念の思いのまま天国に召され、声も出せずにじっとアビスパを見守っている二人のサポーターがおります。創部2年目からこのチームを率いて、そうした数多くの人々の想いをずっしりと背負い、「藤枝で芽生えたサッカー文化を福岡に」と福岡に渡ってきた菊川氏の想いが、ここ福岡の地深くに葬りさせられるのを、私は黙って見ていられないのです。

ここで、福岡の皆さんに問い正したいのです。企業スポーツから地域に根ざしたスポーツ文化の構築を標榜して生まれたＪリーグ、そのプロチームとして、藤枝ブルックスを誘致した福岡市民と福岡県民の皆様、そして、福岡市と福岡市議会の皆様、更には福岡の企業の皆様に、今のアビスパ福岡を、Ｊリーグの理念に根ざしたプロのサッカーチームとして生き返らせる熱意はないのですか？1993年の、あの福岡県民50万人もの署名は何だったんですか？それは、そのスポーツ文化を率いるＪリーグチームを育てたいという署名ではなかったのですか？それは、その産みの苦しみを分かち合い、藤枝で芽生えたサッカー文化を、福岡の地で大きく咲かせたいという署名ではなかったのですか？「プロ野球のライオンズが去った時の我々の思いを忘れてはならない」と語った当時の桑原市長の言葉をもうお忘れなんでしょうか？皆様、もう一度その時のことを思い起こして下さい。今のアビスパ福岡を、Ｊリーグの理念に根ざしたプロのサッカーチームとして生き返られる力は、あの福岡県民50万人もの熱い想いです。あの熱い想いは、ライオンズが去った時の思いをご存じでしたら、あの「産みの苦しみ」をも必ず分かち合えるものと信じています。福岡の皆さん、50万人

もの熱い思いが本物だったら、どうか立ち上がって下さい！勿論、私は、私のみならず藤枝市民は、本物だったと信じています。私は、福岡県民の皆様が、あの「産みの苦しみ」を分かち合うためには、遠く藤枝の地から私の知る限りのことはお伝え致します。

そして、皆様、アビスパ福岡はスポーツ文化の構築を目指すJリーグのプロのチームなのです。ふがいない成績に応援をやめるのではサポーターではありません。滾る熱意も持ってアビスパ福岡の選手達をプロの選手として育てるのが、真のサポーターではありませんか？プロの選手は、オフであっても常にストイックに自分の技量を磨き、シーズン中は自分のプレーに夢を抱かせ、観客を呼び、スポーツ文化構築の一端を担う。Jリーグの理念に“たにまち”は必要ではありません。そうした真のプロの選手に育てるのが、真のサポーターではありませんか？

最後に、福岡には新日鉄に、東福岡高校、筑陽学園高校などを産んできた土壌があります。その地でアビスパ福岡を、滾る熱意でJリーグの理念に根ざしたプロのサッカーチームとして生き返らせ、藤枝市民の願いだった、藤枝で芽生えたサッカー文化をここ福岡の地で立派に咲かせて下さい。

宜しくお願い申し上げます。

2010年3月7日

元藤枝ブルックス後援会広報担当役員

有限会社静岡オープンスクール代表取締役

山下 泰孝

その後アビスパ福岡は、耕ちゃんの掲げた「オール九州、オール福岡」というクラブ方針の元、「チーム担当役員」の耕ちゃんに導かれ、J1昇格を果たしました。耕ちゃんは「就任1年目から結果を出し、記者でありながらクラブ経営でも力を発揮」しました。大塚社長―田中常務体制は、「3シーズンでクラブの基盤を構築」しました。2023年11月4日のクラブ史上初のルヴァンカップ優勝は、経営難を乗り越えた当時常務でチーム担当役員の「耕ちゃん」の功績なしでは成し遂げなかった」と言われました。耕ちゃんは12年神野卓哉氏を説得してチーム統括部長としてアビスパ福岡に呼び、「強化部とタッグを組み、記者時代の人脈をフル活用し選手獲得を遂行」しました。同「年には無名だった地元福岡の金森健志を獲得して、クラブの中心選手に育てた。また、日本代表の富安健洋を小学時代から記者のルートで知っていたためその才能を高く評価していた。チーム強化だけでなく小口から大口の企業を訪問しスポンサー獲得にも多大な貢献をした」と、耕ちゃんのウィキペディアに書かれています。

こうしてアビスパ福岡は、3年に渡って大塚社長と田中常務の努力で再生が図られ、アパマンという大型スポンサーが付き、現在があります。

*内容の性質上一部の内容が、「菊川凱夫物語」と重複してますことはご了承ください。